右隣

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
右隣

【Ｎコード】
Ｎ０５９４Ｅ

【作者名】
チェリ↓

【あらすじ】
１０年前、私の右隣にはいつも陸がいた。
だけど、私はその彼の前から姿を消した――。
そして１０年後、再会した彼には私の記憶がなかった……。
１００，０００ＨＩＴ記念企画特別番外編をサイトにて公開中デス！⇒ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｃｈｅｒｒｙ－ｓｏｚａｉ．ｃｏｍ／

―Ｐｒｏｌｏｇｕｅ―

１０年前、私の右隣にはいつも陸がいた。

でも、私はある日その陸の前から姿を消した。

何も言わずに・・・。

だけど・・・

今・・・

目の前に陸がいる・・・

目を閉じたまま・・・。

私・宇田川結子はこの春、１０年ぶりに東京に戻ってきた。

１０年前、彼・近藤陸の元を離れ、福岡の親戚の家から看護学校へ通い、

そして看護師になった。

その後、そのまま福岡市内の病院で看護師をしていたけれど、

この春、都内の病院に異動になった。

実家から病院に通うには結構時間がかかる為、

私は病院の近くに部屋を借りた。

引越しも一段落して両隣へご挨拶。

左隣の部屋のインターフォンを鳴らすと、中から２０歳前後の

男性が出てきた。

男性・・・といっても２８歳の私から見れば“可愛い男の子”。

引越しの挨拶をするとにっこりと笑って「こちらこそ、よろしく。」

と言ってくれた。

なかなか感じのいい男の子だった。

次は右隣。

だけどインターフォンを数回鳴らしても中からは誰も出てこない。

留守なのかな？

私はまた後で挨拶に行く事にして自分の部屋に戻った。

それから数時間後にもう一度、次の日にもまた次の日にも

行ってみたけれど中から住人が出て来る事はなかった。

空き部屋なのかな？

だけど不動産屋さんは、今は私が入った部屋しか空いていないって

言ってたし・・・

旅行か出張にでも行っているのかもしれない。

私はあまり深く考えないことにした。

数日後、私は脳外科に配属になった。

事故や怪我、病気で脳を損傷した患者さんが集まっている病棟だ。

そして彼は今、この脳外科病棟の個室のベッドで寝ている・・・。

先日、事故に遭い外科病棟に入院。

だけど今日、脳に異常がみられるとかで脳外科に移された。

私はその彼・陸の担当になった。

そして・・・

今・・・

目の前に陸がいる・・・・

目を閉じたまま・・・・。

―1―

脳の異常・・・彼は記憶を失っていた。

全てではなく、一部。

彼の担当医によると今までの記憶が所々抜け落ちているらしい。

彼は・・・陸は、私を憶えているだろうか・・・？

できれば・・・忘れていて欲しい。

静かに寝息を立てて眠る陸の寝顔はあの頃と変わっていない。

１０年前、私と陸が付き合っていた頃と・・・。

高校２年生の冬、私は陸から告白をされ、付き合い始めた。

私も当時、陸の事が好きだった。

だから告白された時はものすごく嬉しかった。

そして・・・

高校を卒業する春。

私は自分の体の異変に気付き、一人で病院へ行ってみた。

結果は・・・

やはり、思ったとおりだった・・・。

妊娠５週目・・・。

都内の看護学校へ進学する予定だった私は目の前が真っ暗になった。

そして、陸も都内の大学へ進学することが決まっていた。

言えない・・・、陸に言えないよ・・・。

言えばきっと陸の人生を狂わせてしまう・・・。

だけど・・・私は子供を諦めたくはなかった。

陸の子供だったから・・・。

私は一人で産む決心をし、両親に相談した。

もちろん、陸の名前は出さずに。

猛反対の中、どうしても産みたいという私の決心の固さに負け、

両親は最善の方法を考えてくれた。

結局、東京を離れたいと言った私を福岡の親戚の家に預けてくれる事になった。

そして・・・卒業式の後、私は誰にも告げずに福岡へ行った。

友達にも・・・陸にも何も言わずに・・・。

だけど・・・１０年後の今。
陸が私の目の前にいる。

私はもう一度、陸の寝顔を見て病室を出た。

翌日、朝。
陸の病室に行くと彼はすでに目を覚まし、体を起こしていた。

「・・・おはようございます。」
私は恐る恐る声をかけた。

陸は私の声に反応し、顔を向けた。

「おはようございます。」

だけど私の顔を見ても顔色一つ変えなかった。

気付いていない・・・？

私は陸に気付かれなかった事にホッとし、

「今日から近藤さんの担当になった宇田川です。」

と自己紹介した。

「宇田川さん・・・？」

陸は少しだけ怪訝な顔をした。

・・・私の名前・・・憶えてるのかな？

「・・・どうか・・・しました・・・？」

「あ・・・いえ、すいません・・・どこかで聞いた名前だな・・・と思って・・・。」

陸はやはり私の名前を微かに憶えていたみたいだ。

「どこにでもある名前ですし、そんなに深く考えないで下さい。」

私は平静を装った。

「ん・・・でも・・・絶対どこかで聞いた事あるんだ。」

そう言って陸は眉間に皺を寄せた。

「あ・・・、無理して思い出そうとしないでください。」

「・・・はい。」

そう返事をしても陸はまだ考えているようだった。

「・・・こ、近藤さん、怪我の方はだいぶ良くなったみたいですし、
後で気分転換に中庭に出てみたらいかがですか？」
ちょっと無理矢理話題転換。

「・・・そうですね・・・今日は天気もいいみたいですし。」
陸は少しだけ笑って窓の外に視線を移した。

「後で連れて行ってもらえますか？」

え・・・。

すぐには答えられなかった。

他の患者さんだったらすぐ「はい。」と言えるのに・・・。

「あ・・・忙しいですよね？、患者は俺だけじゃないのに・・・

ごめんなさい・・・。」

返事を迷っている私を見て、陸は後悔したように言った。

「あ、いえ・・・そんな事ないですよ？大丈夫です。」

慌ててそう言った私に陸は「本当ですか？」と嬉しそうに言った。

「はい、何時くらいがいいですか？」

「んー、2時くらいかな。」

「わかりました。」

私は話題転換した事をちょっと後悔した。

午後2時。

約束通り、私は陸の病室に迎えに行った。

まだそんなに長い時間歩く事ができない陸を車椅子に乗せ、
中庭に連れて行くと陸は私の顔を見てニコッと笑った。

「外に連れてきてもらって正解。
ずっと病室にいたら気分が滅入ってくるから。」
嬉しそうに話す陸はまるで初めてデートした時みたいだった。

私と陸の初デートは高2の冬。
クリスマスの少し前だった。
付き合うようになってからは学校の帰りもずっと一緒だったけど、
まともにちゃんと待ち合わせをしてどこかへ出掛けるのは
それが初めてだった。

「宇田川さんて結婚してるの？」
初デートの回想中、陸からの質問で私は現実へと引き戻された。

「あ、いえ、独身ですよ。」

「えー、こんな可愛い人が？」

「近藤さん、お上手ですね？」

私はクスッと笑ったフリをしながらも心の中では少しドキリとしていた。

だって・・・

あの頃も陸はよく“可愛いよ”って言ってくれていたから。

「いや、ホントにそう思ってるって。」

「そんな事言って、誰にでも言ってるでしょ？」

少し意地悪な言い方をしてみる。

ホントは陸が誰にでもそんな事言う人じゃないのがわかっているから・・・。

「そんな事ないですよ。」

笑っているけど陸の目は真剣だった。

・・・うん・・・わかってるよ・・・。

「・・・宇田川さんてさ・・・」

「はい？」

「いくつ？」

「何がですか？」

一応、とぼけてみる。

「歳。」

やっぱりこれが聞きたかったんだ。

「ものすごいストレートに聞きますね？」

「じゃあ、遠回しに聞いたら素直に教えてくれるの？」

「いえ・・・それはー・・・・。」

「なら、ストレートに聞いたほうがいいでしょ？」

「それはそうですけど・・・」

そーゆー言い方も１０年前と変わらないんだね・・・。

「・・・内緒デス。」

素直に答えてしまうと陸が私の事を思い出してしまうような気がした。

「見た目は２４，５歳に見えるけどなー・・・？」

少し探るように陸は私の顔を見上げた。

「その手には乗りませんよ？」

プイッと素早く視線を逸らす。

動揺してるのがバレる前に・・・。

「じゃあさ・・・下の名前、教えてよ？」

「・・・・。」

陸・・・何か気付き始めてるの・・・？

「そんなに私に興味あります？」

「・・・ん、興味があるっていうか・・・」

陸は口元に少し手を当てた。

「今朝、初めて会った時からずっと気になってるんだ・・・

それで・・・ずっと考えてたんだけど・・・

思い出せなくて・・・でも、絶対どこかで会ってる様な・・・。」

気付き始めてる・・・。

「ダ、ダメですよ・・・そんなに考え込んじゃ・・・。」

私が看護師という立場じゃなかったらよかったのに・・・。

そうすれば何も考えずに嘘がつける。

だけど・・・私がここで「あなたと会ったのは今日が初めてです。」

と言ってしまえば、陸の記憶は余計に混乱してしまうだろう・・・。

「うん・・・わかってるんだけど・・・。」

陸は視線を落とし、それでもまだ何か思い出そうとしているみたいだった。

「・・・そろそろ、病室に戻りましょうか。」

私は俯いたままの陸の車椅子を押し、病室に戻った。

―2―

「宇田川さん・・・。」

「はい。」

病室を出ようとした私を陸が呼び止めた。

「また・・・中庭に連れて行ってくれるかな？」

嫌・・・とは言えないよね・・・。

「はい、いつでも声を掛けてください。」

私がそう言うと、陸は嬉しそうな顔をした。

それから二週間、雨の日と私が夜勤の日以外のほぼ毎日。

陸は私にお昼過ぎから中庭へ連れて行って欲しいと言った。

だけど・・・初日のように私の事を聞いて来る事はなくなった。
もっぱら世間話。

考えてみれば、今までだって年齢や下の名前を
聞いてくる患者さんは普通にいた。
何も特別な事じゃない。

それに陸ももう考え込んでいるような表情は見せなくなった。
私の事は勘違いだと思い直したのだろう。

・・・それでいい。

たとえ、それが間違っているとしても・・・。
その方が陸にとってきっといいから・・・。

陸は後3日程で退院できると担当医が言っていた。

後、3日・・・後、3日の間に陸が何も思い出さなければ

このまま、ただの患者と看護師でさよならできる・・・。

陸が退院する前日の夜。

夜勤に入る事になっていた私は、ナースステーションで

日勤の看護師から申し送りを確認し、陸の病室に行った。

「近藤さん、お薬でーす。」

私が薬を持って病室に入ると、

「こんばんは。」

と陸はにっこり笑った。

「今日は夜勤？」

「はい。」

「そういえば宇田川さんて、ずっとここでナースやってるの？」

私は陸の質問に少しドキッとした。

でも、この質問に正直に答えたとしても陸はきっと気付かない。

だって・・・間違った記憶のままだから・・・。

「ここには近藤さんと初めてお会いした前の日に来たんですよ。」

「へぇー、その前はどこの病院だったの？」

「福岡市内の病院です。」

「福岡・・・？、・・・都内じゃなくて？」

陸は不思議そうな顔をした。

「えぇ、看護学校からずっと福岡市内にいました。」

「・・・ナース歴何年？」

「それ言ったら、だいたいの歳がバレちゃうから言いません。」

「ちぇっ、なかなか引っ掛からないなー？」

「あはは、そんなんじゃ引っ掛かりませんよ。」

私はクスリと笑った。

すると陸は急に私の腕を掴み「・・・ゆうこ。」と言った。

・・・え。

私は瞠目したまま動けなかった。

「宇田川さんの下の名前って『結子』さん・・・じゃない？」

陸は真剣な表情で私の顔を覗き込んだ。

・・・陸・・・思い出したの・・・？

私は何も答える事ができないでいた。

「“結ぶ子”って書いて『結子』・・・違う？」

陸は私の腕を掴んだまま離さないでいる。

漢字まで思い出したの・・・？

「俺の記憶が確かなら・・・歳は俺と同じ２８歳。」

黙ったまま何も答えない私を見つめながら陸はさらに続けた。

「高校も俺と同じ『都立Ｓ高』で実家は・・・」

陸がその続きを言いかけたとき、急患を知らせる院内アナウンスが流れた。

医師と看護師達だけにわかるアナウンス。

「・・・あ・・・私・・・行かなきゃ・・・ごめんなさい・・・・。」

私は陸に掴まれている腕をゆっくりと引っ込め、

逃げるように病室を出た。

だけど・・・本当は脳外科の急患じゃない。

とりあえず私は行かなくていいのだ。

陸・・・私の事、思い出した・・・？

名前も漢字も年齢も出身高も・・・そしておそらく、実家の場所も・・・。

“俺の記憶が確かなら”・・・陸はそう言った。

だけど・・・陸は明日のお昼に退院する。

このまま、上手くかわしていれば大丈夫・・・きっと。

消灯時間。

各病室を見回って確認。

急変した患者さんがいないかどうか、ちゃんとベッドに入って横になっているかどうか・・・など。

大部屋から順に見回って最後は、陸の個室。

ドアの隙間から灯りは漏れていない。

ちゃんと寝ているみたいだ。

そーっとドアを開け、病室の中を覗くとベッドの中で陸は目を閉じていた。

少しだけ近づいてみると小さな寝息が聞こえた。

よく眠っているみたいだ。

私はそのまま病室を出てナースステーションに戻った。

深夜。

私達夜勤のナースはもう一度病室の見回りに行く。

この見回りで何もなければ朝まではわりとゆっくり仕事ができる。

だけど・・・消灯時間に寝たと思った患者さんが

起きて本を読んでいたり、夜食を食べていたり、中には病院を抜け出して

近くのコンビニに行く人までいる・・・。

案の定、今日も数部屋ある大部屋の内、一部屋の患者さんが夜更かしをしていた。

他の大部屋はみんなおとなしく寝てるのにー。

「お願いですから、ちゃんと寝てください。」

「えー、もう少しだけ。」

「今、何時だと思ってるんですか？」

「消灯時間が早すぎるんだよー。」

「皆さんは何の為に入院してるんですか？

病気や怪我を治しに来てるんですよ？」

全員を寝かしつけるのがまた一苦労・・・。

まぁ、これも仕事の内だけど・・・。

「はーい、わかりましたよー。」

そんな大部屋の患者さん達のおかげで陸の病室まで回るのに随分時間がかかった。

陸は病院を抜け出したりするような人ではないけれど、

一応、ちゃんと見ないとね・・・。

懐中電灯の灯りを直接当てないように陸のベッドを間接的に照らす。

・・・あれ？

陸が・・・いない・・・？

私は慌ててベッドに駆け寄った。

やっぱり、いない・・・。

あ・・・トイレかな？

そう思って個室の中のトイレのドアをノックしてみた。
だけど何も反応がない。
そもそも灯りすら点いていない。

「近藤さん？」
私はもう一度ノックして呼びかけてみた。

「近藤さん、開けますよ？」
トイレのドアを開けて中を確認した。
だけど、やっぱり中にはいなかった。

どこへ行ったんだろう？

ベッドの布団に手を当て、温もりがあるかどうか確かめた。

冷たい・・・。

―3―

個室のトイレじゃなくて外のトイレに行く事も考えられなくもないけれど、

布団に温もりがないという事は・・・個室の外のトイレに行ったにしては

随分時間が経っている。

私はすぐに夜勤のナース達に知らせ、手分けをして陸を探した。

だけど陸は病院内のどこにもいなかった。

どこに行ったんだろう・・・？

病院内にもいない、近くのコンビニにもいなかった。

後は・・・実家か陸のアパート。

私は陸の実家に電話をし、アパートの方にも見に行ってもらった。

だけどやっぱり陸は帰っていなかった・・・。

今日で退院といってもまだ安静が必要なのに・・・。

一体どこに・・・。

陸がいなくなってすでに2時間が経過しようとしていた。

病院には陸の家族も駆けつけた。

・・・陸・・・陸、一体どこへ行ったの・・・？

「昨日、近藤さん変わった様子はなかった？」

私と一緒に夜勤に入っているナースが急遽、

日勤だったナースに電話で連絡を取っていた。

変わった様子・・・。

変わったと言えば・・・私の事を思い出した事？

それ以外に思い当たらない。

私は陸が行きそうな場所を一箇所だけ思い浮かんだ。

「私・・・っ！ちょっと、行ってきます！」

私の事を思い出してそれが原因で病院を抜け出したとしたら・・・

多分、あそこだ・・・！

私は急いでタクシーに乗り、ある場所で降りた。

私と陸の思い出の場所・・・・。

お台場海浜公園。

私と陸が初めてデートをした場所だ。

そして・・・

陸と最後にデートしたのもここだった・・・・。

「・・・陸・・・どこ・・・・？」

「・・・結子？」

後ろから陸の声がした。

やっぱり・・・ここにいた。

私はゆっくり振り返った。

「結子っ。」

陸は私に近づき・・・そして肩を抱き寄せた。

「体・・・冷えてる。」

陸はパジャマの上に上着を着ているだけの格好だった。

この格好でずっとここにいたの・・・？

４月も半ばを過ぎたといっても明け方近く・・・

しかも、こんな海風の強い場所にずっといたら・・・。

私は自分の上着を陸の肩にかけようと、体を離そうとした。
だけど陸にしっかりと肩を抱かれていて離れられない。

「私の上着・・・羽織って？風邪ひいちゃう・・・。」

「大丈夫。」

「だって・・・こんなに体が冷え切ってるじゃない。」

「大丈夫だから。」

「・・・もぅ・・・。」

私は陸の冷えた体を温めようと背中に手を回して擦った。
だけど、あの頃よりも広くなった背中は私の手だけじゃ
なかなか温まりそうにはなかった。

「どうして・・・病院を抜け出したりしたの？」

「だって・・・こうでもしない限り、結子はまた俺の前からいなくなってただろ？」

「・・・。」

「俺が退院したら・・・それっきりになる。」

そうだね・・・。

「いつから・・・気付いてたの？」

「結子と再会した次の日。」

そんな前から・・・？

「再会した日の夜、思い出したんだ・・・それで・・・
中庭を一緒に散歩してる内に段々、結子だ・・・て確信していった。」

「・・・そう・・・だったんだ。」

「どうして・・・俺に何も言わずに姿を消したんだ？」

１０年前のあの時の事も思い出したんだ・・・。

「俺の事が嫌いになったから？」

違うよ・・・。

私は首を横に振った。

「じゃ・・・どうして・・・？」

ホントの事なんて、言えるワケがない・・・。

「・・・結子、答えてくれ。」

「・・・・。」

言えないよ・・・。

「・・・聞かないで・・・・。」

私は震えそうになる声を押し殺して、それだけ言うのがやっとだった。

しばらくの沈黙の後、思いがけない言葉が陸の口から出た。

「・・・わかった・・・・、結子が言いたくないなら無理には聞かない・・・・

そのかわり・・・・、俺のところに戻ってきてくれ・・・・。」

「・・・・っ！」

・・・そんな事・・・・できないよ・・・・。

「無理だよ・・・・。」

「なぜ・・・・？」

「・・・だって・・・・陸の前から勝手にいなくなったのに・・・・。

そんな都合のいい事できない。」

「だったら・・・ちゃんと、あの時どうして俺の前からいなくなったのか

理由を言って？・・・じゃないと俺は納得できない。」

「・・・それは・・・」

「・・・結子、俺は結子が突然いなくなった事を怒ってる訳じゃないんだ。

ただ・・・結子が俺のところには戻れないと言うなら、ちゃんと理由が知りたい。

・・・そして、ちゃんと結子の事を諦めたいんだ。」

・・・ちゃんと諦めるって・・・？

「俺はまだ・・・結子の事が好きだ。」

「・・・え・・・・？」

「・・・だから、結子が俺のところに戻ってきてくれるなら・・・
これからずっと俺のそばにいてくれるなら・・・それだけでいい、
何も聞かない・・・・。」

「・・・陸・・・・。」

この１０年間、私の右隣はずっと空きっぱなしだったワケじゃない。
何人かの人と付き合ってきた。
だけど、どの人とも上手くいかなかったのは、いつも陸とその人を
自分でも気付かないうちに比べていたから。
そして本気になれずにいた・・・。

私もまだ・・・陸の事が好き・・・。

だから、こんなに心が揺らいでいるんだと思う。

言おうか・・・言うまいか・・・。

陸のところへは正直、戻りたい・・・。

言いたくないなら無理に言わなくていいと言ってくれた陸の胸に

素直に飛び込んでしまえばそれでいいのかもしれない・・・。

だけど・・・それはフェアじゃない。

このまま戻ったとしても・・・私はまた“何か”あった時に

きっと逃げてしまう・・・。

ちゃんと話して、それで陸が私の事を嫌いになるのなら・・・

その方がお互いすっきりするのかもしれない。

「・・・あのね・・・陸・・・実は・・・あの時・・・・、
私・・・子供が出来てたの・・・・。」

「・・・えっ！？」

陸は予想してた通り、ものすごく驚いていた。
私を抱きしめていた腕の力が少しだけ強くなる。

「それって・・・もちろん、俺の子供・・・だよな？」

「うん・・・・。」

「どうして言ってくれなかったんだよっ！？」

「だって・・・言ったら陸・・・大学行くの止めてたかもしれないでしょ？」

「だからって・・・・っ。」

陸は少し掠れた声になった。

「それで・・・今、その子と暮らしてるのか？」

「ううん・・・。」

「じゃ・・・その子はまだ、福岡にいるのか？」

「違うの・・・結局ね、その子供は・・・流産しちゃったの・・・。
」

「・・・っ！？」

―４―

「交差点の横断歩道で飲酒運転の車と接触してね・・・怪我の方は軽かったんだけど、

お腹の赤ちゃんは・・・助からなかったの・・・。」

「・・・そんな・・・」

「きっと・・・罰が当たったんだよ。」

「？」

「私が陸の事、信じきれずにいたから・・・。」

「・・・どういう事？」

「本当の事言ったら、陸の人生が狂っちゃうかもしれないとか、
そんなのは綺麗事で、ホントは・・・怖かったの・・・・。」

「・・・・。」

「陸におろしてくれって言われるのが怖かったの・・・・。」

「そんな事、言うわけないだろ？」

「うん・・・でも・・・どうしても陸の子供が産みたかったから・・・
そう言われるのが怖くて・・・だから言えなくて・・・それで・・・」

「結子っ！・・・もういい・・・、いいから・・・・。」

「・・・ごめんなさい・・・・。」

「・・・俺の方こそ・・・ごめん・・・何も知らずに・・・・」

「陸は悪くないよ・・・・。」

「何言ってんだよ・・・俺は結子の一番近くにいたのに、それなのに・・・

何も気付いてやれなかった・・・・。」

「陸は悪くない・・・・。」

「ごめん・・・結子にばかり辛い思いさせて・・・・。」

「ううん・・・私が馬鹿だったから・・・自業自得だよ。」

「・・・結子。」

「・・・陸・・・もう・・・放して・・・・？」

これで・・・本当に陸とさよなら・・・・。

「嫌だ。」

「どうして・・・・？、話したら諦めるって言ったじゃない。」

「言ったけど・・・そんな理由だとは思ってもみなかったから・・・・。」

「・・・どんな理由だと思ったの？」

「他に好きな男ができた・・・とか。」

「そんなワケないでしょ。」

「・・・結子は、もう俺の事嫌い？」

「そんな事ない・・・・。」

「じゃ、戻ってきて。」

「でも・・・・」

「理由がわかった今・・・このまま結子を放すわけにいかない・・・・。」

「償いのつもりなら別に・・・・」

「そんなんじゃない。」

陸は私が全部言い終わらないうちに言葉を遮った。

「たしかに償いたい気持ちだってある・・・けど、償いとか・・・・

そういうのじゃなくて・・・・、俺は・・・・っ、

もう二度と結子を失いたくないんだ！」

「・・・陸。」

「それでも・・・結子は嫌か？」

・・・そんな事ない・・・・そんな事ない・・・・っ。

私は陸をぎゅっと抱きしめた・・・。

それから一時間後・・・私と陸は病院に戻った。

陸の体はすっかり冷えて、そしてすっかり風邪をひいた。

おかげで退院は一週間延期になった。

「もし、私が行かなかったらどうするつもりだったの？」

「絶対、来ると思ってた。」

ベッドの中で熱まで出して苦しそうにしているくせに自身満々で陸は答えた。

「結子は平気・・・？風邪ひいてない？」

「うん、大丈夫。」

私の心配なんて・・・・してる場合じゃないのに・・・・。

「・・・なら、よかった・・・・。」

陸はそう言うと安心したように少しだけ笑って目を閉じた。

一週間後。

陸の退院の日。

まだ車の運転や激しい運動はできないけれど、

生活には支障がない。

そしてまだ全ての記憶が戻った訳ではないけれど・・・・。

午後3時。

私は今日も夜勤だから陸の退院のお見送りはできない。

けれど、アパートに着いたら携帯にメールをすると昨夜陸が言った。

午後３時半、タクシーでアパートに戻ったと陸から携帯にメールが届いた。

ちょうど出勤準備をしていた私は、短く返事を返した。

ーーーーー

おかえり。

あんまり無理しないでちゃんと安静にしててね。

ーーーーー

陸が入院している間、私が休みの日以外は毎日顔を合わせていた。

だけど退院してしまった今、そうもいかなくなる・・・。

それはちょっと寂しいけれど、それでも１０年間ずっと

陸に会えなかった事を思うと、これからは毎日じゃなくても

“会える”のは幸せなんだと思える。

私が部屋を出て、ドアの鍵を閉めようとした時、
右隣の部屋から微かに物音が聞こえた。

あ・・・お隣・・・帰ってきたんだ。

私は引越しの挨拶がまだだったのを思い出し、
粗品を持って右隣の部屋のインターフォンを鳴らした。

引っ越してからすでに一ヶ月以上経っているけど・・・ま、いっか・・・。

「はーい。」

中から男性の声がしてドアが開いた瞬間、
私は自分の目を疑った。

「り、陸っ！？」

「結子！？」

お隣さんて・・・陸だったのーっ？！

「なんで・・・結子、ここに・・・？」

「一ヶ月前に隣の部屋に引っ越して来たんだけど・・・

ずっと留守でご挨拶がまだだったから・・・来て見たら・・・」

「隣？」

「うん、隣の部屋。」

「結子・・・隣の部屋なの？」

「うん・・・あ、そうだ・・・隣に引っ越してきた宇田川です。
よろしくお願いします。」
私はにっこり笑って陸に粗品を手渡した。
すると陸はプッと吹き出し、
「こちらこそヨロシク・・・お隣さん。」
と、私のおでこに軽くキスをした。

今・・・

私の右隣には・・・

陸がいる・・・

・・・柔らかな笑顔で・・・。

―４―（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0594e/

右隣

2010年12月14日14時10分発行